



独立行政法人国立病院機構
 岩手病院 地域医療連携室
 TEL : 0191-25-2428
 FAX : 0191-25-2429
<http://www.hosp.go.jp/~iwate/>
 地域医療連携室長 千田 圭二

障害者病棟の質向上

「あるシステムの強さは、どれだけ強いかでなく、どれだけ弱くないかで決まる。～」

——陳浩基（天野健太郎訳）：
 13・67. 文芸春秋社, 電子書籍, 2017, 30%

病院長 千田 圭二



組織を強靱なものにするには、まず弱点を補強して底上げするのが良いのです。そのうえで（あるいは平行して）質向上を図ります。

岩手病院の病棟5つの内訳は重症神経難病病棟、回復期リハビリを主体とした混合病棟、そして重症心身障害児者病棟3箇所であり、すべてが「障害者病棟」です。

入院患者全体に占める重症者の割合は、ここ10数年でかなり増大してきました。超重症者と準超重症者を併せると、5年以上前に全入院患者の三分之一を上回るようになり、その後も増加しつつあります。人工呼吸器、気管切開、経管栄養など医療介護度が非常に高いため、受け入れる病棟は十分な看護力（人員数と質）を備えていなければなりません。

障害者病棟の基準（障害者施設等入院基本料）を10対1でやってきた当院にとって、これ以上高い医療介護度には対応が困難になりつつありました。当然、上位基準

7対1を取得すべき状況です。しかし、7対1取得には看護師を40人近く増員しなければなりません。これは例年の採用者数の3～4倍に当たる大人数です。ただでさえ人員確保が容易でない当地において、しかも地域の医療機関に悪影響を及ぼさないためには可能な限り地域外から募集する必要があります。

この難問を解決しようと、1年前から病院を挙げて取り組んできました。具体策は、東北各地の看護学校への訪問、募集合同説明会への参加機会の倍増、病院紹介用DVDの作成、採用試験の回数増、再就職支援研修の実施、近隣医療機関の病棟変更に関する情報収集などです。

その結果、幸運にも期待に見合う応募者数があり、上位基準を満たせる人員をこの4月に採用することができました。今後は、教育システム、キャリアパス、職場環境、福利厚生などを魅力的で充実したものにしていきます。職員が多く定着するようになれば、この地域の医療・介護・福祉の充実にも寄与できるものと期待します。

最後に「岩手病院公開セミナー」について本紙前号以降の状況を述べます。

昨年12月5日に第7回「パーキンソン病の転倒とその対策」、今年2月13日に第8回「重症神経難病患者の在宅診療の実践」、4月10日に第9回「摂食嚥下障害対策：姿勢と食事」（→次頁上段）、をそれぞれ開催しました。次回第10回は6月12日に「パーキンソン病の服薬管理」を予定しています。皆さん、奮ってご参加ください。

岩手病院 常勤医リスト

診療科

呼吸器科

副院長 櫻井 誠（産業医）

神経内科

医師 小野洋也（日本内科学会認定内科医）

医長 今野昌俊（日本神経学会専門医、日本内科学会総合内科専門医）

医長 堅山真規（日本神経学会専門医・指導医、日本内科学会総合内科専門医）

医長 千田光一（日本神経学会専門医・指導医、日本内科学会総合内科専門医、産業医）

院長 千田圭二（日本神経学会専門医・指導医、日本頭痛学会専門医・指導医、日本内科学会総合内科専門医）

外科

医長 平野貞夫（日本外科学会専門医、日本大腸肛門病学会専門医、産業医）

リハビリテーション科

医長 宮 秀哉（日本リハビリテーション医学会リハビリテーション科専門医）

歯科

医長 佐藤 敦（日本口腔外科学会専門医・指導医）

その他の部門

医療安全管理

室長 櫻井 誠（併任）

地域医療連携

室長 千田圭二（兼任）

栄養サポート／褥瘡対策

室長 平野貞夫（兼任）

臨床研究部

部長 堅山真規（兼任）

重症心身障害医療センター

センター長 千田圭二（兼任）

神経筋難病医療センター

センター長 千田光一（兼任）

副センター長 今野昌俊（兼任）

リハビリテーションセンター

センター長 佐藤智彦（名誉院長）

第9回 NHO岩手病院 公開セミナー開催

MSW 専門職 竹越 友則

平成30年4月10日(火)「第9回NHO岩手病院公開セミナー」を開催しました。公開セミナーを開始して1年以上がたちますが、地域の医療・福祉関係者の方々の参加人数も増えてきて好評をいただいています。今回のテーマは「摂食嚥下障害～姿勢と食事～」で、当院の言語聴覚士・栄養士を講師として開催しました。

摂食・嚥下に関する基礎的な内容から、摂食時の姿勢・食事介助のポイント・食形態の工夫・増粘剤(とろみ剤)の使い方・自宅や施設でもできる「嚥下体操」など、実践でも役立つ内容でした。参加者の多くは訪問介護・福祉施設の調理士や介護福祉士の方々に、質疑応答でも現場での対応方法など多くの質問があり、とても良い機会となったと思います。



～嚥下体操～

- ① 深呼吸 3回
- ② 口を大きく開いて、閉じる 5回
- ③ 口の横引き・すぼめ(「い」「う」) 5回
- ④ 頬をふくらます・へこます 5回
- ⑤ 頬を片方ずつふくらます・へこます 5回
- ⑥ 舌を出す・引っ込める 5回
- ⑦ 舌を上下に動かす 5往復
- ⑧ 舌を左右に動かす 5往復
- ⑨ 唇を舌でなぞる 左右交互に3往復
- ⑩ 発声練習
「KKKKK」
「タタタタ」
「カカカカカ」
「ララララ」
- ⑪ 深呼吸 3回

にっこり笑顔で、おつかれさまでした♡

岩手病院 ST 作成

未来かなえネットの導入について

MSW 専門職 竹越 友則

平成30年4月より「未来かなえネット機構」によるICTシステムの試験導入を開始しました。

この「未来かなえネット機構」は、東日本大震災以降すでに岩手県沿岸部の大船渡市・陸前高田市・住田町の2市1町で導入され実績も積み重ねてきています。当地域では、平成23年度より地域医療・介護連携推進事業として、「一関市医療と介護の連絡協議会」にて住民活動や情報共有などの医療福祉関係機関の連携を図っています。

今回は、ICT導入により医療関係者(病院、医科・歯科診療所、薬局など)・福祉関係者(ケアマネジャー・訪問介護・訪問看護・福祉施設など)の連携を行う関係機関が以前より多くなりますが、患者の医療・介護情報を一元管理し、その情報を共有することが可能となります。このシステムを活用することによって、医療介護サービスの質をより向上できるようにしていこうと思います。

19年導入事例
岩手県は高齢化率の増加をはじめ、各地域に医療・介護等の地域連携を推進するための基幹インフラとしてICT(情報ネットワーク)構築を支援しています。気仙郡域では、この支援を受けて、大船渡市・陸前高田市・住田町の2市1町の医療介護福祉施設を連携施設をつくる計画が実現し、ネットをスタートさせました。

これまで、ワーキンググループや勉強会を重ね、積み上げてきた議論や要望がこのネットワークに反映し、関係機関や施設の利用開始はもとより、気仙の住民に安心・安全を確保できる仕組みづくりを目指します。平成27年度に設計・開発を行い、本格稼働は平成28年度と予定しています。

19年導入事例
高年齢者が、気仙地域では特に高齢者の介護不足が懸念されており、被災後の人口減少に伴い、さらに深刻な問題となっています。

そこで、
●介護者の力量アップの取組方を推進する
●住民一人ひとりに基礎的な介護・医療知識を！
多世代がいっしょに、体系的に学べるよう、気仙内外の専門職やプロフェッショナルの助言も得ながら「住民による、住民のための学習の場」を運営する計画です。

また、プログラム中には、会員の皆さんの参加により、わかりやすく、楽しみやすい学習プログラムを作成し、提供していく予定です。

この「未来かなえネット」は、すべての住民に開かれた組織です。地域性のために、そして受け手である自分自身のために、この活動に参加していません。あなたのアイデア、あなたのメッセージ、そしてあなたが持っている力が、地域の人々に伝わり、勇気と安心を提供していきます。

【会員の権利】
●機関間の連携
●ネットワークによる情報提供
●報酬やバス(多量)の無料利用
●機構が主催・共催するセミナーや研修会へ無料参加

私たちの特徴
1. 医療・介護・保健・福祉を軸とした、地域サービスネットワークを構築します。
2. 地域を等しくし、共に学び共に支え合う、活力みなぎる住民力を育てます。

◆事務局◆
〒029-2311 岩手県気仙郡住田町住田米字川内9-6-5
住田町未来かなえネットセンター
TEL 019-25-2421
FAX 019-25-2429
お問い合わせ mirai-kanae@rock.np.jp